様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２８ 日現在

機関番号：４５３０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０４６５８

研究課題名（和文）生涯学習における健康教育のあり方　ー広島県と宮城県の現状と課題よりー

研究課題名（英文）A study of the Health Education in Lifelong Learning Society -current state of Hiroshima-prefecture and Miyagi-prefecture.

研究代表者
大友　達也（ohtomo, tatsuya）

就実短期大学・生活実践科学科・教授

研究者番号：９０３６９４９７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：国民の健康自己管理における現状、課題、特性を明らかにするため、健康自己管理の行動、健康管理方法の認識、日常生活の健康管理の実践について、宮城県仙台市と広島県広島市の住人を詳細にインタビュー調査し、M-GTAの手法を用いて分析した。健康自己管理には、地域差となりうる「潜在的健康意識の基盤」が健康行動に作用している。「PDCAサイクル」における「P」のない「無計画サイクル」は関係性が影響していることがわかった。互いに責任の生じない他者との関わりを持つことで、健康情報の情報交換が行われている。無計画な性質を持った健康自己管理は、日常のなかで気軽に実践を更新し、促進させる性質をもっている。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　膨大に増加しつつある日本の社会保障費の問題解決には、国民の予防行動の促進、健康寿命を高めることは非常に重要である。それは医学的、あるいは制度上、政策的な研究ではなく、国民側の状況、健康管理に関する生涯学習、教育学的な視点での研究が必要である。国民の過剰診療や生活習慣病の増加は、国民側の問題が大きいと言えるからである。
　本研究の意義は、国民が持つ健康管理の行動的特性、課題などを整理するなかで、これからの2040年問題を前に、どのような生涯学習展開をすれば、健康自己管理が活性化するかを探るための基盤となる研究であると考えている。

研究成果の概要（英文）：We took a detailed survey and analyzed it with the M-GTA method on the behavior of health self-management, recognition of health management methods, and practice of health management in daily life to the residents of Sendai City, Miyagi Prefecture and Hiroshima City, Hiroshima Prefecture in order to clarify the current situation, issues, and characteristics of people's health self-management. In health self-management, the "foundation of latent health self-management awareness" which can be a regional difference, affects the person's health behavior. It was found that the "unplanned cycle" without "P" in the "PDCA cycle" is affected by relationships. Health information is exchanged by having relationships with others that do not cause mutual responsibility. Health self-management, which has an unplanned nature, has the property of easily renewing and promoting practice in daily life.

研究分野：健康教育

キーワード：健康自己管理　生涯学習　健康情報　関係性　予防　健康寿命　潜在的健康自己管理　無計画サイクル

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

日本の社会保障費が増大化しているなかで、医療費の削減には、国民の健康自己管理が重要となっている。健康診査の受診率やがん検診の受診率は低い状態であり、国民の健康意識、特に定年後、職場による健康診査が受けられなくなる中年期以降、高齢者の健康自己管理のあり方が問われていると言える状況である。宮城県と広島県との健診受診率の極端な差異がどのような原因で生じているのかは不明確な状況であった。本研究において、健康自己管理がどのような文化的影響を受け、どのように形成され定着しているのかについては、研究も少なく未開拓であった。

２．研究の目的

本研究の目的は、生涯学習の視点で、国民が健康自己管理における実態を把握し、健康自己管理をどのような形で実践しているかをモデル化するための研究である。

健康自己管理行動は、全国全く同じではなく、地域差が大いにあると考え、仮説検証のため、地域の特性を視野に入れた研究を行うこととした。付け加えて人は現在の一瞬だけではなく、過去から受け継がれている文化を再生産し、現在に至っていると考え、親から受け継いでいる文化、地域として根付いている文化などによる健康管理への影響を探ることとした。さらに、広島市や仙台市は共通して被災経験がある。前者は原爆被害、土砂災害であるが、仙台市は東日本震災による津波や原発事故による放射線災害である。子供のころから受け継いでいる広島市とそれと比較すると最近放射線による福島の事故があった影響を含め、印象的出来事がどのように健康自己管理に影響を与えているかも視野に入れたいと考え、歴史的視点を組み込むこととした。

３．研究の方法

調査対象は、一般論として健康自己管理を意識する年齢層となる４０代後半から７０代の男女とし、宮城県仙台市 7 名と広島県広島市 7 名、計 14 名に聞き取り調査を行っている。２つの地域は都市としての人口はほぼ１００万人の同規模であるが、健康診査の受診率が極端に異なる。仙台市は健康診査受診率が非常に高く、全国で上位の都市である。一方、広島市は健康診査受診率が極端に低く全国で下位の都市であり、受療率は逆に高い。健康自己管理の地域差の有無をみるうえでも、この２か所の調査をする意義はあると考えた。2020 年 8 月から 9 月にかけて面接を行い、分析は M-GTA の手法を用いて概念生成を行った。分析後の 2021 年には、追加調査を電話による追加インタビュー調査にて実施している。面接方法は半構造化面接とし、約１時間の面接を行っており、実証研究を試みた。

歴史的研究としては、実証研究の裏付けに必要と考え調査した。過去の医学水準と現在の医学水準は異なり、現在の患者と過去の患者では、病気の予防や克服、健康情報が少ない時代と情報が豊富な現在とでは、大きく異なる性質がある考えられる。健康自己管理は大きく異なると考ええられる。現在の健康自己管理は、親や先祖から受け継がれている言い伝えや当時の文化があることを視野に入れ、「潜在的な健康自己管理の基盤」があると考えた。被験者が中高年齢層であることから、その親の年代が大正時代、先祖代々の言い伝えの影響を考え、大正から明治時代の国民の健康管理、闘病生活に関する資料を手掛かりに、インタビュー調査をより深く分析できるよう調査した。

４．研究成果

４－１概念の生成

M-GTA による概念生成による分析をした結果、19 の概念が抽出され理論的飽和となった。生成されたこれらの概念から７カテゴリーが生成された。具体的には、１潜在的影響、２印象的出来事、３無計画な日常、４健康にたいする目的意識、５共助、６自己流最適化、７評価の７カテゴリーである。さらに 4 カテゴリーグループに分けられた。（図表１参照）

４－２結論

健康自己管理は、企業などが実践する PDCA サイクル（Plan Do Check Action）のように計画的に実践する仕組みではなく、P(Plan)を外した無計画サイクルであること、人には「潜在的健康管理の基盤」といった歴史的、文化的な影響があり、健康自己管理に地域差をもたらせている可能性の一片をみることができた。仙台にみられる我慢する文化と、すぐに通院する広島との差を窺うことができた。関係性は、P のない「DCA サイクル」に影響を与え、血縁の関係性、知縁の関係性の両面において、責任の伴わないこと、堅苦しくなくフランクな状態によって促進されている。共助においては、自分の知りえた有効な健康情報を他者に伝達するなかで、それぞれの自己流健康自己管理が日常の生活スタイルとして定着している。（図表２参照）

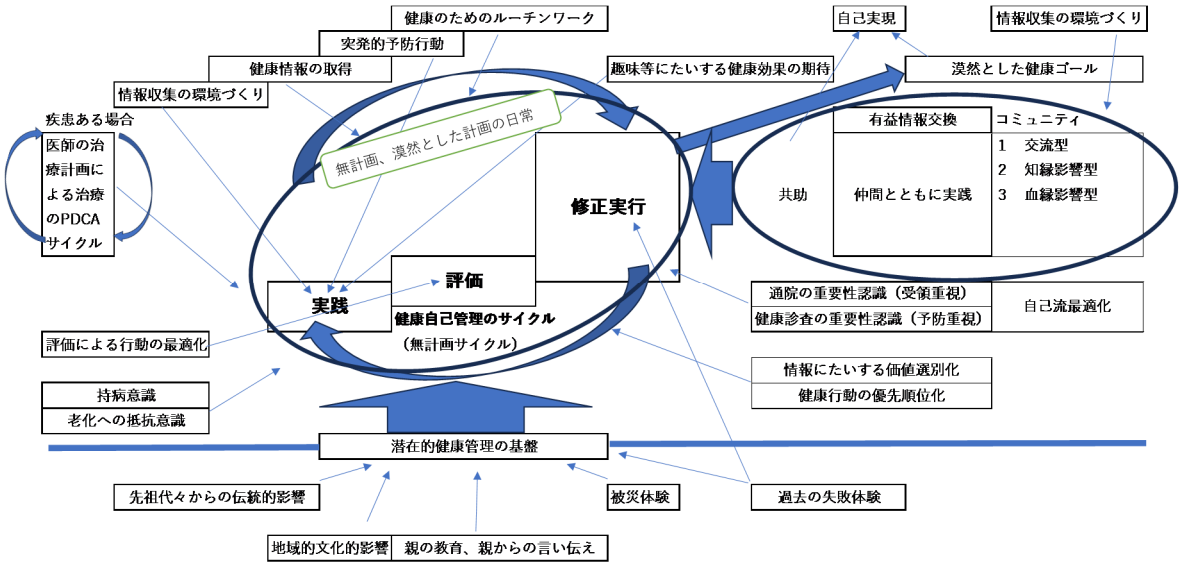
４－３明治時代の古文書の発見

本研究メンバーが明治頃の人々の健康管理の実態に関する資料調査の過程で、明治時代の資料「小寺家文書」を調べた結果、保管された未公開の資料のなかに、日本最古と思われる診療明細書を発見し、明細とリンクした当時の患者日誌を発見した。この科研費研究メンバーによる発見は全国のメディアで報道され、当時の患者の実態を示す鍵となるもので、論文にまとめた。

図表１　概念生成のカテゴリー図

健康管理の基盤	①潜在的影響	１先祖代々からの伝統的影響
		２地域的文化的影響
		３親の教育、親からの言い伝え
	②印象的出来事	４被災体験
		５過去の失敗経験
計画的ではない実践	③無計画な日常	６情報収集の環境づくり
		７健康情報の取得
		８突発的予防行動
		９健康のためのルーチンワーク
	④健康にたいする目的意識	10持病意識
		11老化への抵抗意識
		12趣味等にたいする健康効果の期待
自己実現	⑤共助	13有益情報交換
		14仲間とともに実践
修正実行	⑥自己流最適化	15通院の重要性認識（受領重視）
		16健康診査の重要性認識（予防重視）
		17評価による行動の最適化
	⑦評価	１８情報に対する価値選別化
		１９健康行動の優先順位化

図表２　概念関連図



５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 黒野伸子　石川寛　大友達也	４．巻 54
２．論文標題 東海地方における近代地域医療の形成と西洋医学の受容（１）　－新たに発見された医療関連資料の考察から－	５．発行年 2021年
３．雑誌名 岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究紀要	６．最初と最後の頁 47－56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 黒野伸子、　石川寛、　大友達也	４．巻 2
２．論文標題 小寺家文書にみる明治後期の地域医療（１）　－日誌から読み解く受療行動と患家の動き－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 レセプト論考	６．最初と最後の頁 2ー16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 黒野伸子、　石川寛、　大友達也	４．巻 2
２．論文標題 小寺家文書にみる明治後期の地域医療（２）　－日誌から読み解く受療行動と患家の動き－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 レセプト論考	６．最初と最後の頁 17- 36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 黒野伸子 ，　石川寛 ，　大友達也
２．発表標題 小寺家文書から読み解く明治後期の地域医療
３．学会等名 第55回神奈川地方例会秋季大会・日本医史学会合同例会
４．発表年 2020年

１．発表者名 黒野伸子,大友達也
２．発表標題 2020年5月 古記録にみる明治期の医療観と医療行動－小寺家文書と信玄病院帳簿をてがかりに－
３．学会等名 第121回日本医史学会学術大会（12月に延期）
４．発表年 2020年

１．発表者名 黒野伸子　大友達也
２．発表標題 文献から読み解く古代の医療観、疾病観
３．学会等名 日本史学会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計1件

１．著者名 大友達也　小熊英国　加藤淳　黒野伸子　酒井一由　坂本ひとみ　住谷剛博　内藤道夫　服部しのぶ	４．発行年 2021年
２．出版社 同友館	５．総ページ数 197
３．書名 レセプト管理論	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	黒野　伸子 (nobuko kurono) (70515957)	宮崎学園短期大学・現代ビジネス科・教授 (47604)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
ASIAN COMMUNITY INSTITUTE(ACI)・JAPAN MEDICAL BENEFIT ASSOCIATION(JMBA) Co-sponsored International Research Conference	2019年～2019年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関